

主の呼びかけの目的

2009.4.28(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ヨハネの手紙・第一 1章1節から4節

初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。

ヨハネの手紙・第一 1章7節

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

「永遠のいのち」は、買うものではないでしょう。「罪の赦し」も買えませんし、「永遠のいのち」も買えません。イエス様は、そのようなものを人間に与えたくて、与えたくてしかたがないのです。それは、「おいで。わたしのところに来なさい」という招きです。イエス様の唯一の条件はいつも、「悔い改め」です。悔い改めてから、「赦されたことを信じなさい」と。ピンとこなくても良いのです。何も感じなくても良いのです。「正直」になり、「素直」になることこそ、最も大切なことなのです。救われるために。けれども主をよく知るためには、ちょっと足りないのではないのでしょうか。

ではイエス様は、どのような人々を探し求められておられるかと言いますと、「聞く耳」を持つ人々です。「主よ。私はどうしたら良いのでしょうか。教えてください」と、絶えずこの態度をとると、祝福されます。イエス様のとられた態度は、「わたしの思いではなく、みこころだけがなるように」でした。絶えずこのような態度をとることがおできになれるお方は、もちろんイエス様だけです。「わたしはどうでもいい。お父様教えてください。みこころだけがなるように」と、イエス様は最後までこの態度をおとりになりました。

では、新約聖書の手紙を書いた使徒たちはどうして書いたのかと言いますと、「救われた

人々」がなかなか「成長」しなかったからなのです。救われた時は、「良かった！主をほめたたえましょう」。しかし、しばらくしてからは、なかなか成長しなかったので、この手紙を書かなければならないきっかけとなったのです。ヘブル書の著者は、

ヘブル人への手紙 12章1節後半

私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

イエス様に出会った人々は、一度はみな走るようになるのです。しかし、途中で疲れてしまって走らなくなっている人もいるのではないのでしょうか。つまり、信仰生活とは散歩道ではないのです。「競争」、「戦い」そのものです。そして私たちの戦いは、もちろん人間に対するものではありません。背後に働いている「悪魔」、また悪魔に仕える「悪霊」たちです。

信じる者にとって最も大切な命令は、「主イエスから目を離さないでいなさい。離すと、悩むようになります」と。マルコ伝の中に、次のように記されている箇所があります。

マルコの福音書 3章13節から15節

イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来た。そこでイエスは十二弟子を任命された。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、悪霊を追い出す権威を持たせるためであった。

一方の呼びかけは、「疲れているなら、寂しいなら、困っているなら、おいで」。他方において、「出て行け。全世界に出て行け。福音を宣べ伝えに出て行きなさい」。

パウロは、手紙の中で、次のように証しをすることができたのです。

コリント人への手紙・第一 3章9節前半

私たちは神の協力者であり、

私たち人間は大した者ではない。神の器に過ぎない。器は用いられるならば役に立つ。しかし用いられなければ、神の器ではないと。

コリント人への手紙・第二 6章1節

私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください。

どうしてそのようなことが書いてあるかと言いますと、そのようなことがあり得るからです。神の恵みを無駄に受けることは、あり得ることです。最も大切なことは、「主に頼る」ことです。

今読んでいただきました箇所の中で一番大切なことは、ヨハネ第一の手紙の中で語られ

ている「交わり」ということではないでしょうか。「交わり」とは、単なる関係を持つことだけではありません。本当の意味で一つになることです。

ヨハネの手紙・第一 1章3節

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

これは、初代教会の兄弟姉妹の心からの証しであり、彼らの変わらない喜びの秘訣そのものでした。この交わりがあれば、「全き喜び」を持つようになります。最後に読んでいただきました7節は、考えられないほど大切な箇所です。

ヨハネの手紙・第一 1章7節

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

「私たちも光の中を歩んでいるなら」、(そうしなければ駄目。)光の中を歩むことこそ、「まことの交わり」の土台です。そうでなければ、「本当の意味での交わり」はありません。孤独な人間にとってどうしても必要なことは、「交わり」ではないでしょうか。昨日も、ある人と会いました。その人は、人間の中に入りたくない、と。一人ぼっちだったら、もちろん喧嘩にならないし、自分の思い通りになります。ある意味で楽なのです。けれども、「交わり」ことこそ、大切です。

使徒行伝に出てくる「主の恵みによって救われた人」たちの交わりのような「本当の交わり」とは、どのような交わりであるか知るべきではないでしょうか。使徒行伝2章から2、3節読みましょう。初代教会とはどのようなものであったのか、初代教会の特徴はどういうことであったのか、これを読むとよく分かります。

使徒の働き 2章42節から47節

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた」。考えられない奇跡です。「毎日、心を一つにして宮に集まり」、(日曜日ごとに、ではありません。)

毎日、みな主をほめたたえていたのではないのでしょうか。毎日人々は救われ、その救われた人々は、みなばらばらになって家へ帰ったのではなく、救われた人々は「仲間に加えられた」と記されています。

ここに出てくる信者たちは、五旬節の時に救われた人々ですが、ここで彼らは「使徒たちの教えを守った」と書かれています。この使徒たちの教えとは、いったいどのようなものでしょうか。

使徒たちが伝えたのは、イエス様の言われたこと、つまり福音そのものということではなく、「イエス様ご自身」を紹介したのです。終わりの時代に生きている私たちにどうしても必要なのは、この使徒たちの教えにとどまることではないのでしょうか。私たちにとって大切なのは、自分の思っていること、考えていること、「いわゆるキリスト教」の言っていることではないのです。「聖書は何と言っているか」ということです。

私たちは共に、「信徒の交わりとはいかなるものであるか」を知るべきではないでしょうか。この「信徒の交わり」を、本当の意味でどうしても知るべきです。使徒たちの教えが「イエス様ご自身」であるなら、「信徒の交わり」も「イエス様との交わり」を意味しています。

聖書を読むと、聖書にはただ一つの交わりが書かれています。それは、「御父並びに御子イエス・キリストとの交わり」と。コリント第一の手紙 1章9節をお読みいたします。

コリント人への手紙・第一 1章9節

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

この「御子主イエス様との交わり」こそ、「信徒の交わりの源」です。私たちは、本当に「御父並びに御子イエス様との交わり」を知っているのでしょうか。この「交わり」は、表面的な議論によって生まれるものではありません。この交わりは、郷里を同じくするというような理由から生まれたり、また会議を通して決議された結果生まれるというものでもありません。

この交わりは、「いのち」と「霊」の交わりです。この交わりの間には、少しの暗いところも、影もあってはなりません。御父並びに御子主イエス様との交わりには、「完全な信頼」がなければなりません。御父は、御子イエス様を心から信頼され、ご自分の計画を全部お教えになり、御子イエス様に委ねられました。全てのご計画を、少しの不安もなく委ねることがおできになったのです。

イエス様の御父に対する態度も全く同じものでした。イエス様は、「御父」に完全に「より頼み」、少しも疑わず、父のみこころを行なわれました。あのような驚くべき深い悩みの中にある時も、十字架に向かって歩まれた時も、少しも疑わず、全き信頼を「御父」に置

いておられました。イエス様と父なる神は、お互いにそれほど信頼し合っておられたので、その間には、いつも絶えざる平安と静けさがあったのです。この「お互いの信頼」が、「交わり」です。

この御父と御子の素晴らしい交わりに信徒である人間も加わることができることは、驚くべきことです。主は、何ゆえに私たちのような者をこの交わりに召してくださったのか全く分かりません。ただ一つ分かることは、測り知れない主のご愛のゆえであるということです。イエス様は、この交わりに私たちを招いてくださるために、この地上においでになったのです。

イエス様が地上におられた時、願っておられたことは、第一に、弟子たちがこの交わりに入ることができるようになることでした。私たちは、救われるために救われただけではありません。この素晴らしい交わりにあずかるために救われました。私たちは、良心のとがめが消され、救いの確信を得るために召されただけではありません。この交わりにあずかるために召されました。もし、人が「御父並びに御子イエス様」との交わりに入りますと、使徒行伝にある信徒の交わりに入ったことになるわけです。

使徒行伝に出てくる信徒たちは、特別な人たちではありませんでした。使徒たちも同じく特別な人たちではなかったのです。けれど、使徒はいかにして造られたのでしょうか。使徒は、主に選ばれ、特に召された人々です。前に読みましたマルコ伝3章13節です。もう一度読みます。

マルコの福音書 3章13節、14節

さて、イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来た。そこでイエスは十二弟子を任命された。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ、

とあります。

イエス様は、これを見て分かりますように、使徒たちをまず第一に、ご自分の「みもとに置くため」に召されました。そして更に、「遣わすため」に召されたことが分かります。

イエス様は、ご自分が永遠の昔からもっておられた「御父との交わり」に、使徒たちも入ることを願われました。イエス様は、こんにちも全く当時と同じように、この交わりに私たちがあずかることを願っておられます。「御父並びに御子イエス様との交わり」にあずかることができるのは、何という恵み、また特権でありましょう。この交わりを喜ばずして、ほかのもので満足することがあるなら残念です。

私たちは、イエス様に仕えることが一番大切であると考えますが、主のお考えは違うのではないのでしょうか。イエス様にとっては、まず「ご自分との交わり」を持つように、私

たちに求めておられます。人々は、熱心に働く人なら良い働き人だと考える人もいますが、主のお考えは違います。主のために熱心にご奉仕をしますが、主との親しい交わりを持っていない人がいます。これは憐れなことです。私たちは、弟子と同じように、この世と罪から逃れるために選び出されましたが、そればかりではありません。「御父並びに御子イエス様との交わり」にあずかるべく召されたのです。

「信徒の交わり」は、「御父並びに御子イエス様との交わり」であり、これは「いのちと霊の交わり」です。イエス様のからだの交わり、即ち「信徒の間の交わり」は「霊の交わり」ですから、それには「制限」がなく、「不安」がなく、「疑い」がなく、「全き信頼」がなければならぬはずで、この交わりに、私たちも召されています。

けれど問題は、どうしたらこの交わりに、そして「全き信頼」に入ることができるかということです。弟子たちも、最初はイエス様との親しい交わりをもっていなかったのです。一緒に生活をしました。しかし、実際にはばらばらでした。ただイエス様と関わり合いがあるといった程度でした。イエス様は弟子たちをお召しになり、彼らは三年の間、イエス様と共に生活をしました。夜昼いつも一緒でした。この間に、イエス様はご自分のご目的を弟子たちに明らかになさろうとして、何とかしてイエス様との親しい交わりに入れようとなさったのでした。イエス様は、彼らを父なる神との交わりに導こうとなさいましたが、彼らは駄目でした。理解できなかったのです。イエス様ご自身は、弟子たちと少しの疑いもない「全き信頼」を置く交わりになさりたいかかったのですが、いざイエス様がみこころを示そうとなさると、弟子たちは主を誤解してしまいました。

弟子たちはそればかりではなく、お互いの間にも本当の交わりがなかったのです。ただ関わり合いがあるといった程度でした。彼らの間には本当の交わりがなかったばかりではなく、時々喧嘩もし、言い争いもあり、イエス様がその仲裁をしなければならないといった有様でした。十二人の弟子は、ユダを除いては、心からイエス様を愛していました。そのためにすべてを捨てて、イエス様に従ってきたのでした。それにもかかわらず、彼らの間には「本当の交わり」がなかったのです。お互いにねたみ、誤解し、争いました。ヤコブとヨハネは、自分が一番偉くなりたいと思い、ほかの人々をのけ者にして二人で相談しました。ちょっと読んでみましょう。

マルコの福音書 10章35節から41節

さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。

「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」彼らは「できます。」と言った。イエスは言われた。「なるほど

あなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはしめず。しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです。」十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。

彼らは、怒ったのです。「けしからん。あの二人は」と。このように弟子たちの間には、本当の交わりがなかったのです。

しかし、やがて五旬節が来た時、弟子たちは変わりました。考えられないほど変わりました。この時から、彼らは「本当の交わり」をもつようになったのです。使徒行伝2章を読むと分かります。ペテロが立ち上がった時、みなも、ほかの十一人もともに立ち上がったとあります。ペテロが立った時、ほかの者も一緒に立ったのですが、これは前もってそれを相談していたわけではなく、自発的に、自然にそうなったのです。十二人の使徒は、もはや十二人の一人ひとりではなく、十二人が一つのからだを成したのです。

五旬節の日の立役者はなるほどペテロだったのですが、聖書を読むとペテロだけが目立ったのではなかったようです。人々はみなお互いを見て驚いたと書かれています。ここで彼らはペテロの説教を聞いたとは書いてないし、彼らの証しを聞いたことも記されていないのです。みなお互いを見て、喜びと希望に満たされて、驚き合ったのです。

五旬節は、教会の誕生日と言われています。この「まことの教会」は、一つの宗教団体でもないし、一つの組織でもありません。この時から、信者はもはや一人ひとりばらばらではなく、イエス様をかしらとする肢体につづりあわされたのです。

ペテロとほかの使徒たちは、本当に「一つ」でした。「霊の交わり」をもっていました。使徒たちはお互いに全く信頼し合い、そこにはもはやほかの使徒たちと互いに喧嘩したり、疑いや、恐れをもったりすることは見受けられませんでした。

五旬節の前までは、このような交わりは天の父なる神とイエス様との間にしかありませんでしたが、この日から多くの人々もこの交わりに入るようになったのです。三千人の人々がこの交わりにあずかったと書いてあります。これらの人たちは、「使徒の教えを守り」、「信徒の交わりをなした」と書いてあります。彼らは、「イエス様のみことば」を自分たちの生活の基準として受け入れ、自分たちはすでに信徒の交わりにあずかっているという自覚を持っていました。「この交わり」は、外から来るのではなく、「内に住んでおられる御霊」のゆえに生まれた交わりでした。

エペソ書の中で、パウロはエペソにいる兄弟姉妹にまた次のように書いたのです。
エペソ人への手紙 4章4節から6節

からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべ

てのものの父なる神は一つです。

とあります。これは、彼らの一つになった素晴らしい「交わり」の源でした。「交わり」とは、すべてのものを共有にすることです。初代教会の兄弟姉妹はそうしていました。

使徒の働き 2章44節

信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。

考えられないことです。

ドイツのトリアーで生まれたカール・マルクスという男は、この箇所を読んだ時、喜んだのです。これは本物だ。このような社会を造ろう。彼はいろいろなことを考えて、ソ連のレーニンと一緒にあって本当のことを言ったのです。「宗教は麻薬です。避けるべきものです。宗教はこのような交わりの邪魔をしています」と。本当にそのとおりです。けれども、共産主義者はなぜ成功しなかったのかと言いますと、「初代教会」は主のなされた奇跡のみわざでした。人間が造ったものではありませんでした。このような思想家は、環境を良くすれば、何とか努力すれば全部うまくいく、と。しかし、それは嘘です。今の人間は完全な環境の中に置かれてもすぐ不完全になります。それは、人間はわがままだからです。

「信者となった者たちはみな」と書いてあります。(大部分ではありません。)みな一緒になって「いっさいの物」(ある物だけではありません。すごい!)それは神様にしかできないことです。誰も自分の持ち物を自分だけの物だと主張する者もなく、日々心一つにしていたと書いてあります。彼らは、霊において一つであったばかりでなく、考えも、願いも、心も一つであったのです。これこそ信徒の交わりであり、イエス様のからだとしてあるべき姿です。私たち一人ひとりも、使徒たちの教えを守り、「信徒の交わり」をなしたと言える状態になったら本当に幸いです。

使徒たちは、主イエス様と共に過ごした三年間、この「まことの交わり」を知らずに過ごしていました。これは交わりに入る準備の時でした。この三年間は、実りのない三年間のように見えます。けれど、この三年の年月の間に、彼らの古い性質は少しずつ取り除かれていったのでした。もし、弟子たちがイエス様に従わず、自分の仕事を持っていたなら、彼らは信心深い人々として尊敬されながら生涯を終わったことでしょう。けれど、イエス様と共に歩んでいた彼らは、自らの姿を教えられ、主のみもとで本質的に造り変えられていきました。主の光に照らされて、彼らの心の暗いところは取り扱われ、明るみに出されてきました。彼らの心に隠された思いが表わされてきました。もちろん、弟子たちはほかの人々より悪い人たちではありませんでした。が、「主の光」に照らされた時、絶望的な自らの真相を教えられたのです。イエス様が十字架におかかりになるということになった時、彼らは全く絶望してしまいました。その時、彼らは確かにばらばらになってしまいました。逃げたのです。

交わりの秘訣は、どこにあるのでしょうか。前に読みましたヨハネ第一の手紙 1 章 7 節です。

ヨハネの手紙・第一 1 章 7 節

もし神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」。隠されているものがあってはいけません。

けれど私たちが今持っている悩みは、光のうちを歩むどころか、光の中に立つことすらできないのではないのでしょうか。「イエス様の光」に照らされますと、私たちの生まれながらのものは徹底的に駄目であり、役に立たない汚れたものであることが分かります。もし、「イエス様との交わり」が正しくなるなら、お互いの「横の交わり」(兄弟姉妹の交わり)も正しくなります。

御霊が私たちの上に注がれ、私たちは一つのからだとなるようにと、まことのバプテスマを受けました。パウロはこの事実について、ガラテヤ書 2 章 20 節に書いたのです。何度も何度も読むべき箇所です。信じる者にとって、「信じる者の成長」のために、最も大切な箇所ではないかと思います。

ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっています。

この事実が土台になって初めて、「まことの交わり」が生まれてきます。私たちは日々この立場をとり、認め、主の御前にすべてを明け渡す時、御霊は豊かに私たちを満たしてください、「御父並びに御子イエス様」との豊かな交わりにあずからせてくださいます。

この交わりとは、いったいどのような交わりでしょうか。「光の交わり」です。「いのちの交わり」です。「愛の交わり」です。もし、この交わりが私たちの中に起こると、「主ここにいます」と呼ばれるほど、「主のみ栄え」を現わす私たちになることができるのです。

パウロはテモテに書いたのです。「神の家とは、からだなる教会とは、真理の柱、真理の土台です」と。私たちがこのような教会になりたいものです。

私たちを召し、「御父並びに御子イエス様」との交わりに入れてくださった主に、心から感謝をささげましょう。

了